［ドウシ・テ］

道志手帖

Autumn 2017　no.17

gallery　＊　ねことネコ

作・千々輪竹史

道 志 手 帖

Autumn 2017 no.17

Contents

表紙写真
(2017.7.31)
しめった崖に群生し、ひっそりと星のような花を咲かせるイワタバコ。数は減ってしまったそうですが、今も道志の山々で見る事ができます。

［特集］

水と生きる－神地 水害の記録－（後編） …4

［連載］

どうしの山 山みちマップ⑤御正体山　石川敬子 …10

協力隊だより⑯ …12

手造り遊び用具⑥はがきで作る風車（竹製） 仲井義晶 …15

野の幸山の幸②ミズの実 アケビの実 …15

お仕事拝見⑥佐藤智秀さん　仲井義晶 …16

みなもと体験館イベント参加⑥
「編む」……万能かご編　佐藤八重子 …16

What's "Doshi-techo"?

「道志手帖」とは？

略して「ドウシテ」。「どうしってどんなところ？」という関心から生まれた、道志村地域おこし協力隊を中心とした有志による冊子です。村で生活していて気になったこと、おもしろいなとおもったこと、発見や驚きを、年 4 回報告していきます。2016 年度からは新しい書き手による誌面をお届けします。書き手は常時募集しています。どなたでもお気軽にお問い合わせください。

水と生きる
―神地 水害の記録―
（後編）

大正9年8月、台風の通り道となった神地地区では、洪水や土砂崩れによる家の崩壊で、命を落とす人や行方不明者が出るなど、大変な被害がありました。特集前編では水害を題材にした劇の脚本を紹介しましたが、後編では、「どこで何がおこったのか」「その後どうなったのか」を、より詳細な当時の記録をもとに紹介します。

神地の水害について詳しく、当時の記録を保管されていると聞き、神地地区の山口博康（ひろやす）さん（屋号 大家）にお話を伺いました。

博康さんのお母さんは大正9年の4月生まれ。水害のとき、生後4ヶ月でした。道坂にあった家（屋号 松下）は山崩れにあって流出し、逃げ出した母親の背中におぶわれていましたが、途中で背中から抜け落ちて行方不明になってしまいました。しかし桑の木（現公民館の裏にあった）にひっかかっているのが見つかり、奇跡的に助け出されたそうです。

両親ともに水害を経験している博康さんは、当時の水害にまつわる資料を集め保管しています。なかでも貴重な記録は、民宿北の勢堂の故山口頼光さんが17歳で水害に遭い、そのときのようすを詳細に記したものです。

記録にはどの場所がどうなったのか、具体的な屋号とともに人々のようすが記され、地元の人が読めばありありと光景が浮かんできそうな詳しい描写がされています。屋号と家の位置関係がわかるよう、整理したものが左の地図です。

また、じっさいに現場を案内して頂きました。崩壊したという道坂川は、その後も台風のたびに増水し、堤防がつくられたものの、つい先日（今年8月7日）の台風で、その堤防が壊れてしまったとのこと（写真①）。今もなお、身近な危険であることがわかります。

水害をきっかけに、昭和20年から32年頃にかけて、荒れた山林を再生し、再び水害が起こらないよう、沢に堤防をつくる大規模な治山事業がおこなわれました。（＝参考『道志七里』478・510頁。現在の道の駅の隣りに「東京営林局直轄治山事業所」が設置されていた）これは、地元の人の雇用の場にもなったそうです。

今もむじな沢の上流へ行けば、当時つくられた苔むした石積みの堤防を見る事ができます（写真④）。今では土砂で埋まり、その上に植林された木が大きく育ち、水害後の年月を物語っています。ここには新たに堤防をつく

❶道坂川。点線囲み部分が壊れた堤防

❺県道から見た「ヒナタノクボ」

❷むじな沢から出てきた大岩

❸新しく出来た堤防

❹石積みの堤防

■ 被害にあった家

▬ 災害後設置された堤防

❶ 現況写真撮影場所

特集

る計画が進んでいるそうです。
何より水害の巨大さを今も感じさせるのは、博康さんのお宅の裏に石垣として積まれている岩です（写真②）。人の背丈ほどの巨大な岩は、崩壊したむじな沢から流れてきたものを持って来たのだそう。ここに使われている何百倍もの大量の岩が流れて来た光景を想像すれば、いかに大変なことだったのか、その規模の大きさが察せられます。

＊＊＊

およそ100年前の出来事ですが、親から子へ語り継がれた話を聞き、その現場を見れば、今もなお、身近な脅威として存在し、決して過去のものではないことがうかがえます。だからこそ、そのとき何がおこり、どのように人々が行動したのかを知ることが、今道志に暮らす私たちにとっても、必要なことではないでしょうか。
また、現在に至るまでに、規模はさまざまでも同じようなことが繰り返し起きていて、その度に堤防をつくったり家を直したりしながら、この土地に暮らし続けて来たことがわかりました。

特集

神地大水害記録　一夜の悪魔

大正9年8月4日　山口頼光　17歳（きたのせど）

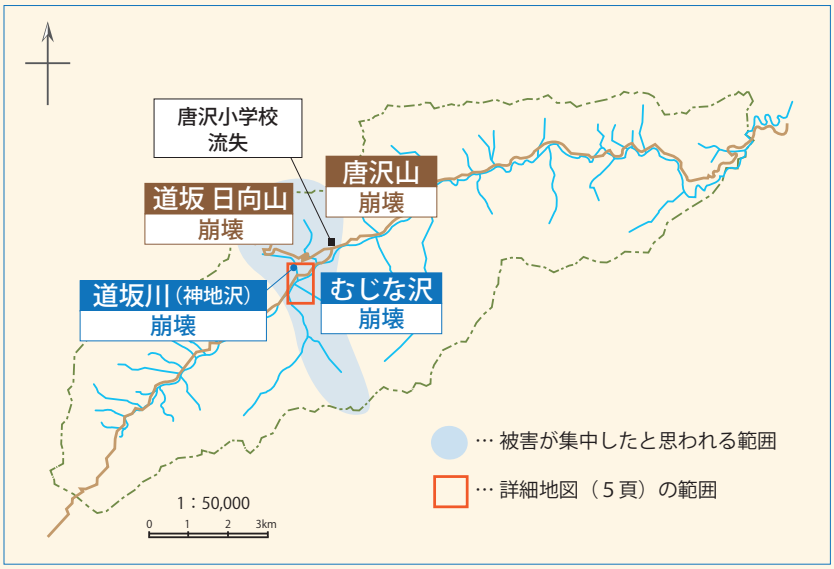
顧みれば去る8月4日の大豪雨の為、我が村は惨惨たる有様であった。世に類なき思うような大荒であるその荒れ事を、順次詳細に記そうと思う。
前日より降り続く雨は4日となってもやむ景色なく、諸々の沢より押し出ずる泥川は、大川のごとき有様、その水が為道志川の増水甚だしく、近年希なる大増水を来した。
何千貫という材木は、小川に木の葉を浮くたる如しに流れ、大橋の流る様は、何千噸の船が全速力を出して去るが如く、残った我々は是水を防止するをかなわず、ただ残念の、目を見張り、手を空握りするにほかならなかった。川底の大石流る音は耳にしびれ、川辺は揺れ、午後2、3時頃暫時止み夕方降り出す。愈々、夜8時頃に至っては恐るべきか大雨は変じて、大暴雨となり天より降下する雨は、手桶にてこぼすが如し、軒より落ちる雨だれはさながら滝の如し、丘といわず川といわず一面泥水となり、山の崩落、泥川石を流す音は百雷の一時に落ちるが如く、家の障子はびりびりとし、地は揺れ大地震の如き有様であった。
この如き大雨は4時間を過ぎ、暫時止みこのところにおいて、村民一同安堵の胸をなぜた。
走り雨戸を開け眺むれば、山は禿げ山となり、諸々の沢出口の石積みは築山の如く、川辺の田畑は見る方も無き、泥海と化してしまった。暫時彼処このところと眺め歩き居る中、またもや雨は降ってきた。家に帰り寝ても眠れず、茶を呑んでも美味しくなし、夜の明けるが待ち遠しき事はたとえんに物なかった。余り待ち遠きが故に、床につき寝た心持ちなかりしが、はっきりあいて居た目を閉じ、うとうとしたかと思うと、最早明けはなれた。また家を飛び出し、赤坂の所で神地中組方面の方を眺め、くどいている内に、上の方かたより山口相之助（屋号 大上）、山口福次郎（〇）両氏が来たり。山口久次氏（屋号 彼方村）宅、後山崩壊し来たり、家を押しつぶし、山口千代吉（仲村）母かつ氏両名圧死の報にて、急ぎ中組のほうへ行こうと思ひて行ってみると、中開戸の下の沢おおいに荒れ、中開戸（山口伊古十郎）の家は石積みとなっていた。

（中略）

中開戸の下をやっと通り、中組を過ぎ道坂へ行ってみると、ヒナタノクボ崩壊し来たり、イノコグラへ飛び上げ飛び下りた山崩は、又、道坂へ飛び上げ、佐藤治重、山口留吉、佐藤松太郎諸氏の家は、大川へ押し出されて流出し、山口庄太郎氏は、馬屋、便所と共流出し本宅の二階下をもぎ取り流出し、二階上だけは残っていたという。山崩は如何に早いかという事が想像される。
山口三之甫氏宅は、幸いにもつぶされただけで皆其処に埋没されていた。氏は不幸中の幸いであった。また、山口駒吉氏宅に行ってみると、縁側に佐藤由松氏次女三好はやはり無惨にもはらわたは飛び出し、口は裂け見るもむごたらしい有様であった。これより他まだ行方不明、明、桂男、房等、死者2名、行方不明3名、
また、昨夜の有様の物語を聞いて暗涙を忍ぎ得なかった。その有様は左の如くであった。

水と生きる
―神地 水害の記録―（後編）

これからもこの土地に住み続けようとするときに、どんな覚悟が必要なのか。水（山）とともに生きて来た先人の歴史が、それを教えてくれています。



昨日午後2、3時頃道坂川増水し来たり、佐藤治重氏（屋号 ヤスド）宅庭まで泥水押し寄せ来たり、その水が為、庭端より上にあった所の竹薮を掘り押され、また、台所にまで押し入り来た、ここにおいてせどより穀や種々家道具を山口留吉（屋号 松下、イカケ）宅へ運搬し、また、家の方にあった鍛冶屋の道具も、山口庄太郎氏（屋号 大上）宅に運びおき、家人一同留吉宅にうつり居れり、三之甫氏は夕方、山口鉄吾氏（屋号 赤羽根）のクラヤが増水の為危険の状態となったので、穀を本家に運搬するというので、それに手伝いに行っていた。

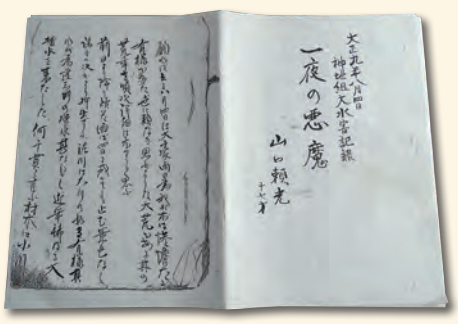
それを家人は知らないで「光、行って見てこい」というので、光治君はおじいさんのうちに行って聞いてみると、来ないというので家に帰ろうと思ったけれども、余りの大雨の為、暫時躊躇していました。そこへ、姉と中山の佐藤由松氏（屋号 中）の次女三好とともに訪ねてきた所、居ないというので、今度は3人で家に帰り聞いてみると、まだ来ないというので、隣りにはどうかと、留吉氏宅へ行ってみると居ないので、暫時居た。また、三之甫氏は穀運搬終わり、家に帰り見ると子どもが尋ねに留吉氏宅へ行ったというので、また、氏は留吉氏宅へ行った。行ってみると大勢来た、24名。

（中略）

（庄太郎氏宅）長男寛永は次男仲造を背負って、蚕室へ居たり親達が「それっ」といったら逃げ、崇重氏（屋号 沢）の方へ逃げろ言いつけ居たり、その時山崩の来るとともに、母しげは「寛っ」と高音あげるとともに、寛永は崇重氏の方へ逃れて来たり。それを親達は、それとも知らないで「寛よ々」と尋ねたり、そうすると上の方で崇重氏が「こっちに居るから安心しろ」というので、ここに親達安堵の胸をなぜた。庄太郎氏宅を押しつぶした山崩は、留吉氏宅を押し流し、この家の中に居た所の24名は一時、山崩、家とともに押し流された。

上の方で庄太郎氏宅が地震の如き中に「ピチッピチッ」と家のつぶされる音に、留吉氏宅に居た24名の者は、それ大上がつぶされたという中に、最早山崩と家とともに24名の者は押し流された。そのなかでどうして5、6名の死者を出しただけで助かったが、そのときの状態は左のとおりであった。

これよりさき、道坂川、益々音響は大きくなった。治重氏母は嗚呼び、我が家どうであるかといって家にいたたまれずに、家を出て留吉氏宅かみの方へ出て、嗚呼び我が家はと思い見た。また、家に居た20名ばかりの者もそれではと行ってみようと思い、入口を出ようとすると、上の方で「寛を」という声したかと思う中、最早山崩は飛び来たり。飛び来た山崩は留吉氏宅を、家、人24名と馬等一瞬にして押し流さる。その水が為、山口三之甫氏家潰さる。この如き有様で、大勢どうして助かったか、三之甫氏は山崩とともに押し流され、やっとのことで止まり、やれよかったと立とうとする一刹那、またしも材木が身体の上を通った。



特集

大正9年村民の度肝を転倒さす一大水災は道志の水害史に生きた地獄絵図を展開したのであった。

――それは8月3日であった。夏空を覆う乱層雲からは大粒の雨が降り出した。この雨は夜もすがら山峡を叩きつけ茅屋根を落ちる雨脚は滝つ瀬の如く前庭を流れ、村民は目覚めがちな長い一夜を過ごした。明けて4日になるも猛雨は容易に静まらぬのみか益々勢を増し山腹には随所に白い奔流が木の下闇を潜って大川へ躍り込み、午後に至ってしばらく雨雲も切れて薄い陽差すら濡れしょぶれた往還に影を落とす頃には、例年の大洪水程度の降雨量は道志侵蝕谷を水漬にしていた。――ところが天体の悪戯は毒牙をこれだけでは納めず、黄昏が山村を夜のしじまに覆い包まんとする8時頃から、又々豪雨は奥山のすず竹の密生より茂く、殆ど空間も許さぬ一大水簾は、宛らバケツの水をぶち零すに等しく、轟々たる水声すら加えて実に3、4時間道志全地域は水槽責めに遭ったも等しい状態に置かれた。

　磧では土砂石塊が流れはじめ、あちこちに山崩が起こり、次第次第に規模は大きく、おどろおどろと地鳴を交えた音響は遠く近く雷神と鰻が乱舞しているかと疑うばかりで、猛雨に包まれた村民は近隣の連絡すら意に委せず、心細き極みの内に流石の猛雨も夜半過止んだが、この間実に2千ヶ所に及ぶ大崩壊地を生み、村民に天の一大鉄槌を下す惨状が待ち秘そんでいたのである、この猛雨は大又沢から神地鳥ノ胸山を中心として道志村を横切り、盛里村を経て北都留郡七保村へ抜けたのであるから村内では神地を核心として、善之木の東部と川原畑の西端が甚大な被害を蒙ることになった。

　大川の水は且て村民が見たこともなく赤黒く濁り渦巻き、深い河底を満して磧の巨岩を転がし押流していた、午後11時頃騒然とした深夜の峡間に一段凄まじい轟音が起って向原の山腹は一瞬暗夜にも無気味な山素肌をぽっかり露し大崩壊を起した。この崩土は物凄い山津波となって道志本谷に躍り込んで行き、太い川筋は完全に土砂の堰堤に遮断されるところとなって、押下っていた雨水はここに氾濫、神地前の田耕地は全地区河川の濁流下に潜ってしまった。この崩壊に5分計りの違いで、道坂日向の久保の崩壊が起こった。向原のびやくにいたたまれず神地部落民はそれぞれ豪雨の中に避難を開始していたが、この内23名は一段小高く危険の少ないとみた山口留吉方に寄合ったのである。この時久保から押落ちて来た山津波は、物凄い加速度を以て轟然神地沢を飛び越え、勢あまって猪ノ子倉を乗越え、再び神地沢を荒れ渡って道坂部落を怒濤狂わしく一嘗にしてしまったのである。

　為に大上・山口荘太郎。やすど・佐藤春重。松下・山口留吉。酒屋・山口三之甫及び山口松次郎の家屋5戸11棟は一瞬にしてその片影だに残さず吹飛び潰え流され、山口留吉宅に集り逃げ後れた23人は、戸外を決死の覚悟で走る警防者の呼びも間に合わず、大きな家屋は一転二転人を入れたまま転倒の後、人も家も四散八転、家屋の巨材はちぎれ跳び、人は土に埋れ流れくだれ、虚空を掴んで往還を矢の如く流されてゆく者、畑地に投込まれて失心する者、御坂降古成の山土は鮮血に染り、救いを求める絶叫、土に埋って息絶えるもの、気狂う母親の手に拾い上げられたのは何処の児か、安穏道志の山里も瞬時にして阿鼻叫喚の地獄絵図と変り果ててしまった。

　二つの一大崩壊が殆ど同時刻に襲った為、土砂は高く道志本谷を遮蔽して中山部落前は湖水状となり、破損した家屋の雑材は、折重なって中山橋付近に逆流していた。

　この外狸穴沢の崩壊も凄じく、製材所・渡辺長七。原・渡辺清蔵、2戸4棟は潰え流され、唐沢山に発した崩壊は沢を氾れて唐沢小学校を流失させたのであった。この時村で調査された被害状況は、

災害表　大正9年水害表　道志村役場

堤防決潰5ヶ所　間数105間　損失価額5、250円
県道決潰　埋没10ヶ所　間数18町50間　損失価額1、850円
同毀損40ヶ所　損失価格400円
里道決潰　埋没5ヶ所　間数5町50間　損失価格1、500円
同毀損20ヶ所　損失価格200円
橋梁県道流失　墜落6ヶ所　損失価格1、200円
同破損1ヶ所　損失価格50円
橋梁里道流失　墜落50ヶ所　損失価額1、500円
同破損50ヶ所　損失価格500円
用水路破損10ヶ所　損失価格1、000円
人事死亡　12人
同　負傷　14人
建築住家流失　崩壊29棟　損失価格29、000円
同其他浸水38棟　損失価格7、600円
非住家流失　崩壊56棟
田生毛ノ損失米1、200石　損失価格3、600円
畑生毛ノ諸作物損失　価格5、900円
田畑以外の土埋没、崩壊100町　損失価格30、000円
同其他浸水10町　損失価額1、000円

　そして通り魔の如く道志谷を前代未聞の水災禍に巻込み、尊い犠牲を山に捧げることになった。

死亡者（全員神地組）
山口千代吉　山口かつ　山口源三郎　佐藤みよ志　佐藤四五次郎　同妻ふさ　同子平五郎　渡辺まつ　同子重盛　同子かね子　同不詳

行方不明者（全員神地組）
山口明　佐藤桂男

牛馬流失
馬、渡辺清蔵所有（神地）牛、杉本貢所有（善之木）馬、杉本宗左衛門（川原畑）

流失家屋
山口荘太郎宅（神地）山口留吉宅（〃）山口三之甫宅（〃）
佐藤治重宅（〃）山口松次郎宅（〃）渡辺長七宅（〃）
渡辺清蔵宅（〃）杉本貢宅（善之木）佐藤伊太郎宅（川原畑）
唐沢小学校（〃）佐藤照蔵宅（〃）杉本宗左衛門（〃）

全壊家屋
山口久次宅（神地）山口伊子十郎宅（〃）

水と生きる
―神地 水害の記録―（後編）

半壊家屋
佐藤豊信宅（神地）　渡辺金七宅（〃）　渡辺由治宅（〃）
渡辺新次郎宅（〃）　佐藤由松宅（〃）　渡辺広政宅（〃）
渡辺昇宅（〃）　佐藤鷲之助宅（川原畑）

床下浸水は殆ど神地全戸に及び、三ヶ瀬川合流点より下流付近田地は勿論、山鼻の畑に至まで磊々として土砂の積む荒涼原野と化し去った。――明ければ8月5日台風一過、村民が恐ろしかった一夜を語り合いつつ神地に集い寄ったが、あまりにも惨又惨たる現状には手の施しようを知らず、僅かに涙と共に犠牲者の骸を次々と収容し、罹災民は親戚隣家を頼って一時身を寄せることになり、翌6日には悲涙に濡れる11の棺が共同墓地へ、とわの葬列を続けたのである。

道坂峠33曲の粗道は随所に破壊され、馬の歩合をはばんでしまい、辛くも人の背に依って急援物資を谷村町に仰ぎ、8日には県から急護班が緊急救護に来村してみれば、村民も何時迄も悲胆と失心の時を過ごすこともならず、涙を蔭して復興の鍬を握るのであった。ああ誰かあの豪雨の暗夜に立って、頭上に崩折れて来る山肌を見つめ得たものがあるだろうか。もしありとせば、恐らく山は大きな屋根蔓を打振り打振り小さき人の子に無気味な嘲笑を洩していたかもしれない。山は恐しく且つやさしき慈しみを山の児に与えている。

――時は移って道志川は、道志の山はたのみなく村民に幾多の資源を与え、遠くは大横浜市民を養う水源を涵養しているが、反面源流地の崩壊は波及的急速調で災害地を拡大している。幸い大自然の猛威と闘う堰堤、砂防、造林の治山事業が進捗して、科学の偉力は道志の風水害史を一変させることであろうけれど、大自然の営みと人との闘は永劫にこの山村に輪廻の歴史を重ねてゆくことであろう。

（以上『道志七里』78～83頁より抜粋）

●大正9年8月4日の台風で土砂崩れがおこり、ブラクで13人死んだ。その時自分の家は一段下の道沿いにあった。近所の4、5軒が自分の家の2階に集まって、夜が明けるのを待っていた。裏の土手が崩れて裏の家の人が2人亡くなった。我が家はぎりぎりだった。明け方、水があふれて外を歩くことができなかった。沢の尻の3軒の家は夜明けに石で屋根棟まで埋められてしまった。このブラクは土砂崩れが多い。鉄砲水も多い。（Y・Kさん　男性　大正元年生）

●大正9年8月4日、暗くなりかけた8時頃、土砂崩れがあった。自分が8歳の時。自分の家は三ヶ瀬の山中橋の近くで製材所をやっていて、家屋も全部流されてしまった。三ヶ瀬の方の沢が荒れてきて、ざっと押し流されてしまった。善之木では何でもなかったが神地だけが被害にあった。台風の道というのは狭いのだと思う。その頃は台風などといわず、オオミズとかオオアレゴトなどといっていた。

沢（むじな沢）からこちら側には自分の家と渡辺寿隆さんの家の2軒しかなかった。土砂崩れの時に、8時頃、沢がビリビリ響いてきた。山が崩れて押してくる音だ。おやじが「それ逃げろ」と指揮をして、子供たちは逃げ出した。そのころお蚕をやっていて、この話は後で聞いたのだが、おやじはすぐに逃げてしまったが、おふくろはランプをかけるだけ遅れて、うちを飛び出すとすぐ、水がきて流されてしまった。

4つ上の姉がいて、嫁に行く時に桐の箪笥を作ってあげるといって、おやじが桐を植えていた。おふくろは流されていって、ちょうどうまくその桐に抱きつくことができた。ひとつの山崩れが押してきて、1回通ったあと、ひいたから、こちら側の岸にたどりついた。自分たちは山岸に倉屋とよばれる物置に避難していた。おやじは「おふくろはだめだ。流されてしまった」といっていた。そこへおふくろがびしょぬれになってやってきた。えらい騒ぎだった。

避難していた倉屋まで水がきてしまって、山に逃げた。山の途中でハンノキか何かの木があるところが、いくらか高かった。真っ暗でどこにもいけないから2軒でそこに避難していた。いくらか傾斜のあるところで、うちの家族が下側、渡辺さんの家が上側に立って、体をくっつけてた。

自分の家族は全員助かったが、隣りの渡辺さんの家では即死が2名、隣のおばさんが泥水を飲んでしまって、苦しんで翌日のお昼頃に亡くなってしまった。赤ちゃんも死んでしまい、4名がなくなった。即死したのは自分より2歳年上と同い年の女の子だ。（自分は）カラカサをかぶって雨の中を逃げていて、ムシロをかぶっていたので土砂に埋まったが、空気のすきまができて息をすることができたので助かった。みんな土砂にからだが埋まって、自力でほって逃げ出したが、おやじが「なんだか足元がぬくい。どうやら一人埋まっているようだ」といって、掘ったらその子が出てきた。

三ヶ瀬にはむじな川の上に5軒の家があり、一番奥のS・Mさん（屋号オキ）だけが5軒のなかでマンゾク（水害がなかった）だった。他の4軒が食料もなにもなかったので、そこの家に集まって、大雨でたたき出されたり、埋まったりしたジャガイモを掘り起こして食べて、数日をすごしたのではないか。そのうち下の方と連絡がつくようになっておにぎりなどがはいったのではないか。

おやじの実家のW・Iさん宅では高いところの屋根に避難して助かった。ハラ（屋号）は人間は助かったが土砂がきて、家も馬、いぬ、猫も流されてしまった。道坂では8、9人亡くなっている。佐藤宅では4人くらい亡くなっている。そのとなりのイカケ（屋号）のうちではいまだに5歳くらいの男の子が行方不明でいる。神地のオオヤより、しものうちにアッチムラ（東村）の民宿をやっている家は土砂がきてつぶされて自分のおじが下敷きになってしまった。

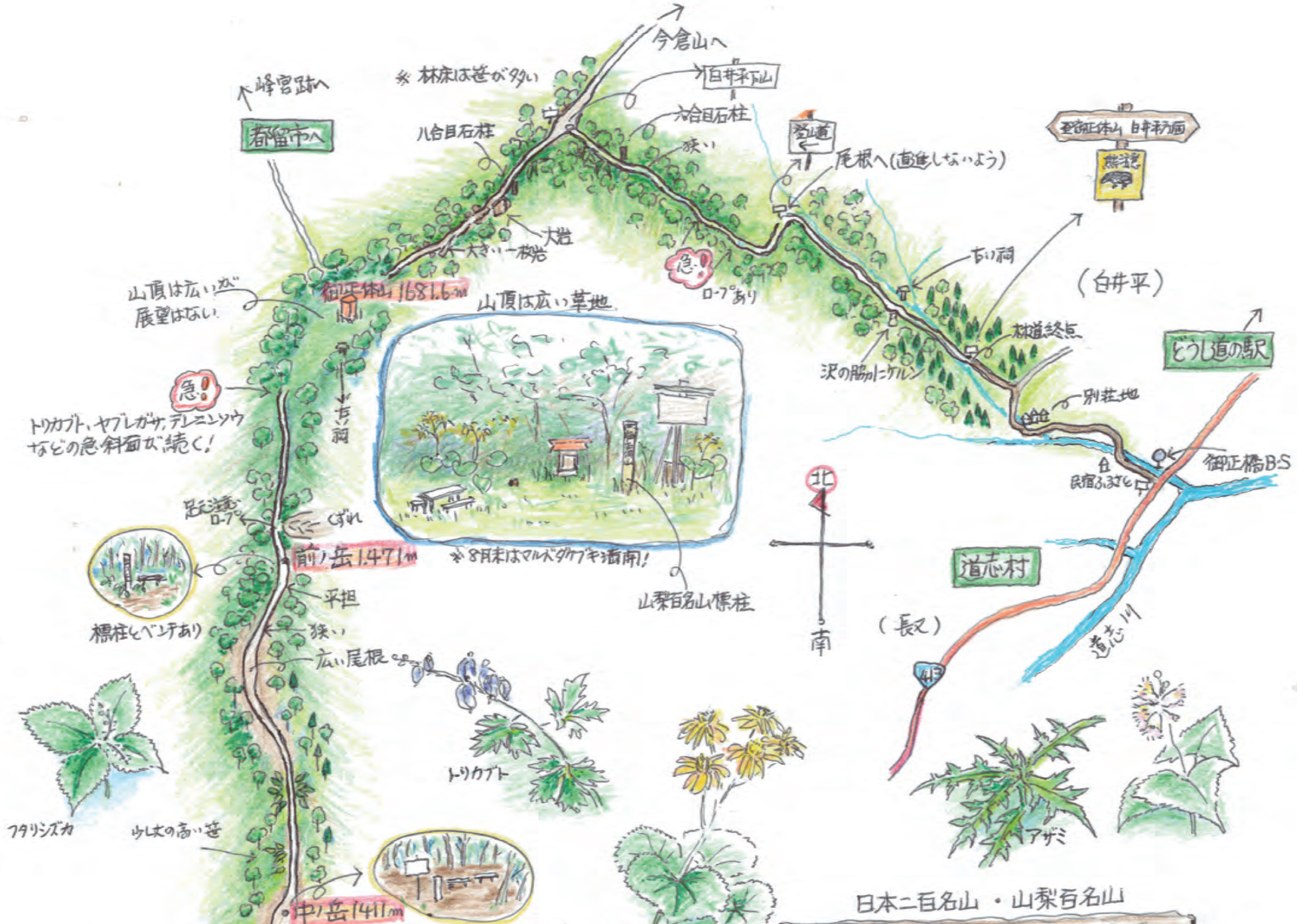
その時の慰霊碑などは特にないが、神地橋の近くに個人で地蔵を作った家がある。（W・Kさん　男性　明治45年生）

●大正9年にアレコト（台風）があり、父が亡くなった。土手が崩れて来て生き埋めになった。神地だけで五人ほどが亡くなったのではないか。（大正9年生）

●大正9年の洪水で通っていた小学校が崩れた。神地では全戸が潰れる被害となった。（男性　明治43年生）

（以上『山梨県史民俗調査報告書第6集
道志の民俗　南都留郡道志村』より抜粋）

特集


今倉山へ
※林床は笹が多い
白井平下山
峰宮跡へ
都留市へ
八合目石柱
六合目石柱
狭い
登山道
尾根へ(直進しないよう)
至御正体山 白井平方面
熊注意
大岩
大きい一枚岩
急!
ロープあり
古い祠
(白井平)
山頂は広いが
展望はない
御正体山 1681.6m
山頂は広い草地
林道終点
どうし道の駅
沢の脇にケルン
別荘地
急!
トリカブト、ヤブレガサ、テレンショウ
などの急斜面が続く!
古い祠
御正橋BS
民宿ふるさと
足元注意
ロープ
くずれ
北
前ノ岳1471m
※8月末はマルバダケブキ満開!
山梨百名山標柱
平坦
標柱とベンチあり
狭い
広い尾根
南
道志村
(長又)
道志川
トリカブト
フタリシズカ
少し丈の高い笹
アザミ
中ノ岳1411m
日本二百名山 ・ 山梨百名山

御正体山（みしょうたいやま）

1681.6m

御正体山は都留市と道志村の境にあって道志山塊の最高峰です。日本二百名山，山梨百名山のひとつに数えられています。古くは養蚕の神の山として敬われていました。江戸時代後期に美濃の僧妙心が入山し人々の信仰を集めました。山中で即身仏となりその姿が御僧体と呼ばれたことから山の名になったという説もあります。北側にはその峰宮跡があります。山頂には御正体権現が祀られています。一等三角点がありますが樹木に囲まれ展望はありません。山頂一帯は広葉樹林の「やまなし森林100選」に選ばれています。平成16年10月15日、皇太子殿下が登頂されて、その際のベンチとテーブルが良い休けい場所になってます。

御正橋BS →2:00 ←1:20 自井平分岐 →0:45 ←0:30 山頂

山頂 →1:45 ←2:05 石割山分岐 →0:40 ←1:05 山伏峠BS

◎時間は目安として見て下さい。

作画 K-CO
2017.8

協力隊だより 16

このページでは、地域おこし協力隊の活動を報告していきます。

七瀧佳至

春にまいたレタスはよくでき、毎朝数十個収穫し、道志と都留の道の駅に出荷する日々でした。玉ねぎもつくりましたが、小振りで、あまり販売できるものにはなりませんでした。ニンニクも初めての栽培でしたが、一年を通してやってみることで、どの作業が大事なのか等、わかることがたくさんあり、次に活かせそうです。ニンニクの加工品も検討しています。

8/31 am10:00　トウモロコシ畑の片付け

トウモロコシをたくさんつくりましたが、収穫直前に台風で倒れたり水に浸かったりしてしまいました。また、出荷したものも、ほかの出荷者と重なり思うように売れませんでした。時期をずらして植えて収穫時期を分散させるなど、工夫が必要だということがわかりました。

トウモロコシのあとに、レタスを植えました。５種類のレタスの苗を時期をずらしてつくりました。

9/11 am10:00　レタスを定植

9/11

ニンニクを７月に収穫しました。収穫したニンニクは都留で保管し、少しずつ道志の道の駅に出荷しています。黒ニンニクもつくっています。粒が揃わずそのままでは出荷できないものもたくさんあるので、試しにしょうゆ漬けにしてみています。

文・写真　香西恵

鳥澤 拡太

夏野菜の収穫をしています。7月に収穫したジャガイモと一緒に「紅椿の湯」に出荷しています。5月に植えた4種類のサツマイモは、葉が枯れてしまったり、動物に掘り返されたりして心配していましたが、今ではよく育ち、ホッとしています。まわりの人に教えて頂きながら、栽培から出荷まで、農作業を体験し、学ぶ日々です。

畑 @戸渡3

8/6 am10:00 トウモロコシの収穫

8月には、トウモロコシ「メグミゴールド」の収穫をしました。役場で栽培しているものの一部を担当しています。約1000本弱とれ、道の駅で販売されました。

畑 @戸渡3

8/28 pm13:00 夏野菜の収穫・出荷

協力隊の抱井さんからもらったトマトの苗が大きく育ちました。収穫したトマトは選別し、きれいに拭いてパックに詰めます。ミニトマトより小さい「マイクロトマト」や、オレンジ色のトマトなど、いろいろな種類をセットにしています。

8/28

5月に植えたキクイモはこんなに大きくなりました。花が咲き、葉が枯れたら収穫です。

抱井昌史

昨年はお試しだったので15キロ程度でしたが、今年は150キロ程蜂蜜を収穫することが出来ました。6月の天候が良く花が良く咲いたおかげです。最近は、ミツバチの敵、キイロスズメバチの対策が課題です。

畑のほうは、富士なすやトマトなど夏野菜を道の駅に出荷したり、「おばあの台所」で使ってもらったりしています。

@おばあの台所（板橋）

9/1 am10:00 収穫した野菜を届ける

@神地1

実が大きく重い富士なす。枝が折れないよう支柱に結わえます。富士なすは「横浜ビール」にも出荷しています。

「春から、抱井さんの野菜が届くのを待っていました。そのとき採れる旬のものを大事に料理に使わせてもらっています」（おばあの台所より）。

春まきのレタスは「サラダうどん」になりました。

はちみつは「おばあの台所」や道の駅、「レストランほろほろ」など、村内各所に置いてもらっています。採れる花の蜜によって味が違います。個人的には、この春道の駅そばの桜を目当てに採った蜜が、一番でした。

@神地2

9/8 食用菊の打ち合わせ

ハウスで栽培している食用菊の花が咲き始めました。

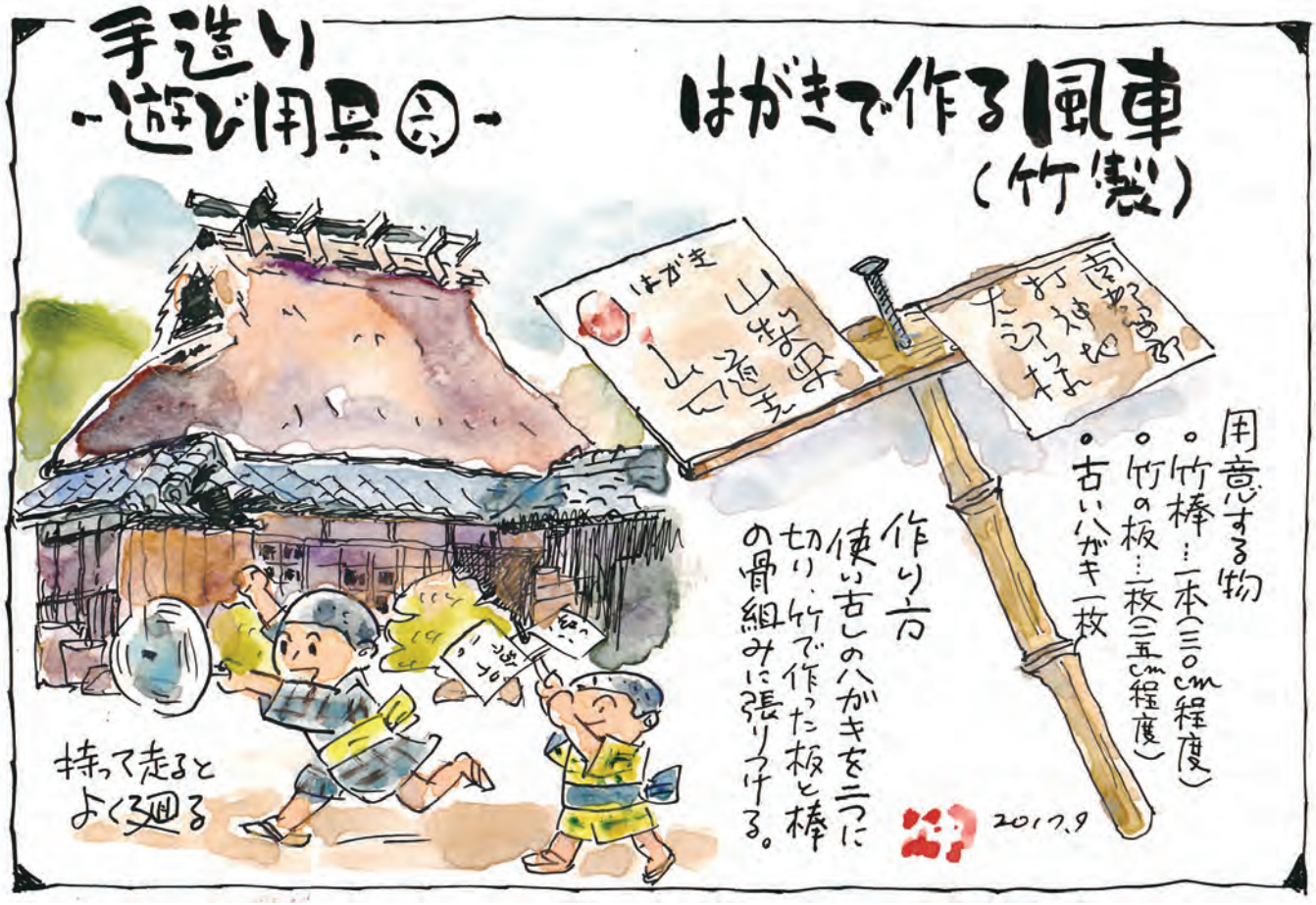
キイロスズメバチに壊された巣

お酒を吹き付ける

@的場

9/4 pm13:00 群れを合体させる

群れの構成員が少なくなると、群れを維持することが出来なくなり、放っておくと死んでしまいます。そのため、キイロスズメバチにやられて小さくなってしまった群れ同士を一つに合わせます。ミツバチは匂いで群れを判断するため、匂いがわからないようにお酒を吹き付けます。



作画　仲井義晶

野の幸 山の幸

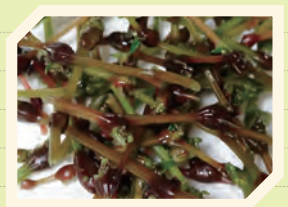
第2回　ミズの実 アケビの実

身近で採れる野山の恵みをおいしく味わう方法を研究します。前回取り上げたミズ。おもしろい実ができると知り、川に探しに行きました。アケビの実と合わせておいしい夕食になりました。

葉のつけ根に赤っぽいコブのようなものが出来ていました。時期が来ると落ちて種の役割を果たします。小指の先ほどになるそうですが、時期が早いのか、米粒～小豆くらいの大きさ。群生しているうちのごく一部、一つの茎に4、5個しか出来ません。小一時間で採れたのはほんの一握り。

ミズの実のおひたしとアケビの肉詰め

ミツバアケビの実。外側が紫色にならないものを「せいだあーくび」と呼ぶのだそう。「せいだ」とはジャガイモのこと。ざらっとした触感といい、色や形といい、そっくりです。紫のアケビに比べると甘くないそう。種のまわりをしゃぶると、つるんとして柿や栗のようなほのかな甘さ。外側はこの辺では食べませんが、ぬか漬けや炒め物にしてもいいそう。今回は肉詰めにしてみました。アクが強く、皮をむくと白い肌がみるみる黒っぽくなるので水にさらします。弱火でじっくり焼くと、思いのほかやわらかく、苦みがあり、油とお肉とよく合います。弾力のある食感と苦みは、ゴーヤに似ているかもしれません。



茎の先のほうだけ摘み取り、葉を除きます。さっとゆでると実の部分も緑色に。しょうゆをひとたらし。茎はシャキシャキ、実はヌルヌル。食感がおもしろく箸がすすみます。

採集・調理指導：レストランたんぽぽ　　採集日：9月14日

この冊子は平成 29 年度地域おこし協力隊活動事業費により作成しました。

道志手帖【ドウシ・テ】
no.17

発行日　2017 年 9 月 28 日　発行　道志村地域おこし協力隊　編集責任者　香西恵
〒 402-0209　山梨県南都留郡道志村 6181-5　道志村中央公民館 2F
TEL：0554-52-2118　ホームページ：http://www.doshi-te.jimdo.com

お仕事拝見 ⑥ （株）モック犬橋　佐藤智秀さん

“さわって、使って、飾って”うれしくなるような木工の小物品の加工に父の代から携わって４０年、木の魅力を伝えようと走り続け、振り返ってみれば還暦。
道志の「花咲か爺さん」になって、「より華やかな木工品の魅力を道志から発信し続けたい」そんな思いで仕事に熱中しています。

作画　仲井義晶

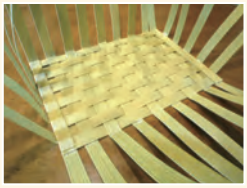
みなもと体験館イベント参加　ドキドキワクワク体験コーナー 6

憧れのスローフード体験、木工体験。道志村に移住してきた私にとって、みなもと体験館でのイベントは毎回未知の事でいっぱい！　私のドキドキ、ワクワクをこのコーナーで紹介します。

「編む」……万能かご編

１本の形状の素材から様々な「もの」を創り上げるのは、面白い事に人類の共通した太古からの営みだ。ことに手先が器用とされる日本人は生活のあらゆる物を身近な素材を活用し創ってきた。みなもと体験館では１年のプログラムを組んだ「作品教室」が開催されており（要年間申し込み）、その中に「編む」事をベースとした作品教室がいくつか組まれている。今回は万能かご作りをご紹介したい。

編む材料は「クラフトバンド」という紙の素材だが、竹や籐より加工しやすく、完成した作品にニスを塗る事である程度の防水性もある。制作の中で重要なのは、材料の「クラフトバンド」をいかに正確に切って用意するかだ。これが出来れば後の編む作業は以外と早い。今回は四角い籠なので四角い底を作る。底から立ち上げた縦のバンドに横からバンドを組み込むように編んでいけば完成だ。取っ手の長さ次第で手提げバックにもなるし、何でも入れられる「万能かご」にもなる。



バンドを切る時、頭を使うが「編む」時は無心になる。繰り返しの作業だからだろうか。現代は情報過多といわれる。大自然に囲まれた道志村で、「編む」という「無心」の時をすごす。太古からの DNA が安心するようなやすらぎの時間……。（佐藤八重子）

道志村地域おこし協力隊

協力隊へのご意見や本誌のご感想をお聞かせください。
お気軽に左記の宛先へご連絡ください。